

嵇康詩小考

甲斐, 勝二
福岡大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/9736>

出版情報 : 中国文学論集. 14, pp.52-77, 1985-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

嵇康詩小考

甲 斐 勝 二

魏晉の王朝交代期に生きた嵇康及び阮籍は、世俗の紛雜を竹林に避け、後世所謂「竹林の七賢」と稱された隱者たちの領袖的存在として夙に有名である。この竹林の士たちの遊びが果して具體的に行なわれたか否かはひとまず置くとしても、舊志の傳える所から推すと、この二人の間にはひとかたならぬ交遊があつたらしい。例えば『晉書』阮籍傳は以下の話を傳えている。

籍、又た能く青白眼を爲す。禮俗の士を見れば、白眼を以って之に對す。嵇喜來りて弔するに及び、籍白眼をす。喜、慚はずして退く。喜の弟康之を聞き、乃ち酒を齎し琴を挾みて焉に造る。籍大いに悦び、乃ち青眼を見す。⁽¹⁾

阮籍が嵇康の兄嵇喜を禮俗の士として白眼で追いかえし、嵇康には青眼で迎えたというこの有名な話は、阮籍と嵇康の相互理解の深さを物語るばかりでなく、二人が同様な思想の下に生活を營んでいたことをも示唆するもので

ある。

とはいえ、結局のところ彼ら二人はその處世態度を大きく異にしてしまった。簡明にこれをいえば、當時曹魏を壓倒しつつあった司馬晉の權勢に對して、阮籍は徹底的な韜晦を計り、巧みにその下にもぐり込んで生を全うするのだが、これに反して嵇康は、その良友呂安の冤罪にまき込まれて刑死するという結果に終り、司馬氏に屈服することとなる。

このように、思想的には類似しておりながらも、處世的には結局まったく異なってしまう阮籍と嵇康との差について、西順藏氏は次のように考へる。⁽²⁾つまり、阮籍の方は觀念の中に造り上げた「自然」に超越することによって、現實世間に強要される自己の生の不滿を解決することができたのだが、嵇康の場合は「自然」に自己をあずけきれなかった、あずけるにはあまりに強い心のおもいであり、それ故強要されて生きる道を拒否しはねとばされた、と西氏は説くのである。

筆者もその主張には基本的には同意する。しかし、西氏は嵇康のその「心のおもい」を形づくる具體的なものに関して、單に「個人のいのちの叫び」とまでしか述べていない。確かに「個人のいのちの叫び」が「心のおもい」の背景としてあるものとはいえ、彼の詩を見るとき、それはもう少し具體的なものとして考えることが可能であると思われる。

この小論では、嵇康の詩に着目することによって、彼の「心のおもい」の具體的な一面を明らかにしようとするものである。⁽³⁾

一

あらかじめ結論を提示しておくなら、その「心のおもい」の一面とは利益社會とは別のところに成立する人と人の共感、または連帶感、或いは信頼感といったものを大切にしようとする情感であると思われる。

これを確認するためには、嵇康が彼の住む世の中をどのようなものと感じていたかについて三つの點を述べることから始める必要がある。

その第一のものとしては、政治社會と個人的世界との對立の意識が擧げられる。これについては、兄嵇喜が官界へ出仕する際に贈ったとされる詩羣中の五言詩、及び兄嵇喜の答詩が参考になる。

まず五言詩から見よう。この詩は大きく三段に分けて考えることができる。初めの一段では次のように詠う。

雙鸞匿景曜

戰翼太山崖

抗首漱朝露

啼陽振羽儀

長鳴戲雲中

時下息蘭地

雙鸞、景曜を匿し

翼を戰む太山の崖

首を抗げて朝露に漱ぎ

陽に啼して羽儀を振ふ

長鳴して雲中に戯れ

時に下りて蘭地に息ふ

自謂絶塵埃 自ら謂らく塵埃を絶し

終始永不虧 終始永に虧けずと

何意世多難 何ぞ意はん 世多難にして

虞人來我疑 虞人來たりて我を疑おそれしむと

ここでは、二羽の仲睦まじい鸞鳥の美しい自然の中での自由闊達な生活の姿が描かれている。彼らは、その塵埃を離れた高遠な場所での生活が永遠に続くものと信じ、山澤を司どる朝廷の官吏である虞人が、彼らをおびやかに來るなどとは予想だにしていなかったのであった。この二羽の鸞鳥が、彼らの個人的な世界に暮す嵇康、嵇喜の兄弟を象徴し、虞人が政治社會から彼らの世界への侵略者を代表するのは明らかであろう。

次の一段に詠われるのは、突然迫り來た虞人の捕鳥の網と、その網から逃れんとする鸞鳥との闘争である。

雲網塞四區 雲網四區を塞ぎ

高羅正參差 高羅正に參差たり

奮迅勢不便 奮迅するも勢は便ならず

六翮無所施 六翮は施す所無し

隱姿就長纓 姿を隱すも長纓に就き

卒爲時所羈 卒として時の羈とまぐ所と爲る

單雄翻孤逝 單雄翻りて孤り逝き

嵇康詩小考(甲斐)

哀吟傷生離 哀吟して生離いまわかれを傷む

徘徊戀儔侶 徘徊しては儔侶を戀ひ

慷慨高山陂 慷慨す高山きふの陂

その鬭争では、彼らは結局力負けし、一羽は捕獲され、もう一羽はやつとのことと逃れ得て、高山の山腹で生き別れになった相手を思つて慷慨せざるを得ないはめになる。この段は、官界からの強い誘いに、思いがけずも兄が出仕を決めたことについて、残る嵇康の側からの悲しみを述べたものと考えてよい。

最後の段は、鸞鳥という象徴的な對象より離れて、現實に官界へと出て行く兄に對して直接述べられる。

烏盡良弓藏 烏盡きれば良弓藏され

謀極身必危 謀極まれば身必ず危し

吉凶雖在己 吉凶は己に在りと雖も

世路多嶮巇 世路には嶮巇多し

安得反初服 安ぞ初服に反りて

抱玉寶六奇 玉を抱き六奇を寶とするを得んや

逍遙遊太清 逍遙して太清に遊び

攜手長相隨 手を攜へて長く相隨はん

嵇康から見るなら、兄がこれから出て行くところとすると、利益欲得づめのところで、不要になればさっさと

處分される誠に情容赦のない場所である。そこは、自分がいくら慎み深く行動していたとしても、それくらいでは到底及びもつかない危険が待つところである。もし、そこへ出てしまふならば、もはや嵇康のもとに歸つて來れるはずもない。だから、嵇康は、そんな場所に行つてしまふよりも、今までどおり二人で高遠な世界を夢みつつ自由瀟灑な生活をしようではないか、と兄に呼びかけるのである。

この詩より推察すれば、嵇康が、彼の暮している世の中を大別して、一つは兄が出仕していく政治社會、つまり「世路」の場と、他の一つは逍遙し太清に遊び得る自己の私的な場との相反する二種があると認識していたことは明らかであろう。嵇康にとっては、「世路」の世界は危険極まりない所に見え、嵇康側の世界は自由で安寧な場所であった。

嵇康が以上のように世の中を二種に分けて考え、しかも彼の側の世界にこそ留まることに固執するということは、兄嵇喜の答詩と比較することによって一層明らかになる。今はその三首目を擧げる。

達人與物化 達人は物と化し

無俗不可安 俗の安んずべからざる無し

都邑可優游 都邑優游すべし

何必棲山原 何ぞ必ずしも山原にのみ棲まんや

孔父策良駟 孔父、良駟に策うちて

不云世路難 世路難しとは云はず

嵇康詩小考（甲斐）

出處因時資 出處は時資に因り

潛躍無常端 潛躍に常端無し

保心守道居 心を保ち道を守りて居れば

視變安能遷 變を視安んじ能く遷る

ここでは、嵇康の立てた二つの世界の對立は表面上の異りにすぎないものとして否定されている。嵇喜は、世の流れに沿って場所を選ばず臨機應變に情況に適應するのがよいのだと考えるのであり、心のもち方さえしっかりしているのならば、世路にあつても事態の變化を見抜き、安んじるべき所に安んじ、危険が迫るならば移ることも可能だ(『禮記』曲禮上「安安而能遷」というのである。住む場所を選ばないというこの態度を持てばこそ、嵇康と袂を分つて出仕して行くこともできたわけである。

嵇康の世の中に對する認識として擧げておくべき第二の點は、上述のごとく彼は自分自身の世界を持っていたとはいへ、彼の暮す現實の時代に對しては、とうてい自分が住めるような時代ではないと感じていたことが擧げられる。これについては、「述志詩」二首中次に擧げる一首の初めの部分を見れば明らかである。

潛龍育神軀 潛龍、神軀を育て

濯鱗戲蘭池 鱗を濯い蘭池に戯る

延頸慕大庭 頸を延ばして大庭を慕い

寢足俟皇羲 足を寢めて皇羲を俟つ

慶雲未垂景

慶雲、未だ景を垂れず

盤桓朝陽陂

盤桓す朝陽の陂まが

悠悠非我匹

悠悠たるは我が匹に非ず

疇肯應俗宜

疇たふか俗の宜しきに應ずるを肯はん

殊類難徧周

殊類、徧周なり難く

鄙議紛流離

鄙議、紛として流離す

輶軻丁悔吝

輶軻、丁まさに悔吝すべし

雅志不得施

雅志、施すを得ず

冒頭にあらわれる潛龍は彼自身を示すとみてよい。以下は、自己が活躍する時機の到らぬ嘆きである。彼の過ぐす時代は、萬物にまとまりがなく、つまらぬ論議が雜駁としており、そこに暮らす彼にとっては、不遇感の下に憂うるばかりで、自己の志を實行することもできないのであった。

第三に擧げねばならないのは、その世の中に生きる者の生命の無常さというものである。これについては、亡き母を傷む「思親詩」の最後の部分を見れば十分であろう。

慈母沒兮誰予驕

慈母没して誰と予ともにか驕わいせん

顧自憐兮心切切

顧みて自ら憐み心は切切たり

訴蒼天兮天不聞

蒼天に訴うるも天は聞かず

淚如雨兮歎青雲 淚は雨の如く歎は青雲のごとし

欲棄憂兮尋復來 憂を棄てんと欲すれども尋ねて復た來たり

痛股殷兮不可裁 痛みは殷股として裁つべからず

ここには、嵇康の營む生活の上に、突然襲いかかった慈母の死というできごとに對する悲しみが述べられている。いくら蒼天に訴えても届かぬ生命の世界自體が持つこの不條理性は、母と子のつつましい情愛の生活に容赦なく入り込み、陽春の如く彼を可愛いがった慈母を奪い去ってしまった。嵇康はその不條理性に對して全くの無力を感じざるを得ず、ひたすら慟哭するばかりである。

ところで、この死という生命體必然の運命と、先に見た危険な政治社會とが嵇康の營む生活に對する關係には類似する點がある。それは、嵇康の方がいくら靜寂、安寧に暮そうとしても、向う側の方から一方的に、また壓倒的な力をもって攻め込んで來ると彼が感じていたところである。このことは、嵇康が營む生活の場が現實的にも精神的にもそれだけ脆弱なものであり、かつ外からの力に對して受動性の高いものであったことを示すものではないだろうか。

二

とはいえ、嵇康がそれらの侵略に對して自己を守るべき方法を講じていないわけではない。次に、それについて見てみよう。

このことについては、まずこの時代多くの者が夢みた不老不死の神仙世界への現実的な飛遊を希求したことを擧げねばならない。もしこれが可能であるのなら、無常な死からも、ままたらぬ俗世からも一度に自由になることができたであろう。その願望を詠うのが「游仙詩」である。この詩では、まず初めに、

遙望山上松 遙に望む山上の松

隆冬鬱青葱 隆冬に鬱として青葱たり

自遇一何高 自遇、一に何ぞ高き

獨立迴無雙 獨立、迴く雙無し

願想遊其下 其の下に遊ばんと願い想へども

蹊路絶不通 蹊路絶えて通ぜず

と、現実の世界で理想を貫いて孤高に過すことを、嚴寒に耐えて獨り立つ山上の松に託して示し、自分にはそのような行爲は願つても不可能であると述べる。以下、傳説の仙者王子喬らとの神仙界での樂しげな生活のありさまを詠う。

王喬昇我去 王喬、我を昇^あげて去り

乘雲駕六龍 雲に乘り六龍を駕す

飄飄戲玄圃 飄飄として玄圃に戯れ

黃老路相逢 黃老、路に相逢う

嵇康詩小考（甲斐）

授我自然道 我に自然の道を授くること

曠若發童蒙 曠として童蒙を發くがごとし

採藥鍾山隅 藥を採る鍾山の隅

服食改姿容 服食し姿容を改む

蟬蛻棄穢累 蟬蛻して穢累を棄て

結友家板桐 友を結びて板桐に家す

臨觴奏九韶 觴に臨みて九韶を奏すれば

雅歌何邕邕 雅歌、何ぞ邕邕たる

長與俗人別 長く俗人と別れ

誰能覩其蹤 誰か能く其の蹤を覩ん

傳えられるところによると、嵇康は當時の道士孫登や王烈に従って教えを請うているが、どうやら神仙への才能は持ちあわせていなかったらしく、結局は人の住む世界に留まらざるを得なかったようである。⁽⁴⁾

そうなると、他の方法で自己の安心を求める必要がある。次に挙げる「酒會詩七首」中の一首は、ままならぬ俗間に暮していかざるを得ない嵇康の一つの態度を示すものだと思われる。

淡淡流水 淡淡たる流水

淪胥而逝 淪胥として逝く

汎汎栢舟

汎汎たる栢舟

載浮載滯

載こに浮き載こに滯る

微嘯清風

清風に微嘯し

鼓楫容裔

楫を鼓して容裔たり

放權投竿

權を放ち竿を投げ

優游卒歲

優游として歳を卒ふ

すべてのものをまき込んで流れていく川の水とは、嵇康の周圍に廣がる、彼の主體的努力のみではいかんともし難い世間を意味するだろう。栢舟は『詩經』に見える語で、鄭箋によると仁人を比えたものといつてよいとされる。⁽⁵⁾ここでは文脈から考えて、その仁人たる嵇康が乗る小舟を示すものと思われる。嵇康は、その川の水の流れに載った小舟にゆらゆらと身をまかせ、流れを利用して自己の行くべき方向を定める權や竿すらも捨てて生きていくというのである。とはいえ、それでも自己を仁人に比し「清風に微嘯し、楫を鼓して容裔」としていられるのはなぜであろうか。それは、嵇康が自分の主體性を忘れて安易に俗間に浸ったのではなく、彼が乗った小舟の中に彼自身の主體的世界を確保し得る自信があったからに違いない。つまり、世間に擡頭しようとしたり抗ったりして危険な目に會うよりも、無理をせずに流れにまかせ、うまい具合に身を守り、その一方で自己の個人的な世界を確保して、つつましく生きていこうというわけである。一名「秋胡行」と呼ばれる彼の四言詩は、その立場に立って作られた教訓詩として見る事ができる。

嵇康詩小考（甲斐）

その詩では、例えば第一首では、

富貴尊榮 富貴尊榮は

憂患諒獨多 憂患諒に獨り多し

と詠い出し、

惟有貧賤 惟だ貧賤有るのみ

可以無他 以って他無かるべし

と、貧賤に甘んじてこそ安樂に暮し得ることを述べる。また、その第三首では、後半で

欲得安樂 安樂を得んと欲すれば

獨有無倦 獨り倦無きこと有るのみ

歌以言之 歌いて以って之を言えば

忠信可久安 忠信こそ久しく安すべし

と、自己の屬する社會に忠信を守り、無難に生きていくことが、安樂に暮す手立てなのだと言くのである。もちろん、其五の詩では「智を絶し學を棄て、心を玄黙に遊ばせん」と詠い始めるように、彼の心の世界はこのままならぬ俗世にあったのではない。其六の詩では、「王喬と雲に乗り、八極に遊ぶことを思ふ」と詠い、其七の詩では、「鍾山に徘徊し、駕を層城に息ましむ」と詠じるところから考えれば、この身は俗界に留まるとも、心中では神仙の世界での逍遙を夢みていたのである。

以上のような嵇康の處世觀は、當時の激變する政治情勢の下で、生まれながらに官僚候補として政治社會の中に組み込まれてしまっている者にとつては、恐らく仕方のないものであつたと思われる。阮籍も、嵇康と同様な處世觀を持つていたことは、彼の殘した詠懷詩を見ることによつて容易に推測することができる。嵇康の兄が白眼を以つて追ひ返され、嵇康には青眼を用いたというのは、この點にも係るものに違ひない。

ただし、阮籍と嵇康の詩の内容から窺われる彼らの生活の内面には、一つの大きな差があつた。まず、阮籍について見ておくと、例えば、詠懷詩其四において彼は以下のように詠っている。

嘉樹下成蹊 嘉樹下に蹊を成す

東園桃與李 東園の桃与李

秋風吹飛藿 秋風吹きて藿を飛ばし

零落從此始 零落は此從り始まる

繁華有憔悴 繁華にも憔悴あり

堂上生荆杞 堂上にも荆杞生ゆ

驅馬舍之去 馬を驅して之を捨て去り

去上西山趾 去りて西山の趾に上る

嵇康詩小考(甲斐)

一身不自保 一身すら自ら保てず

何況戀妻子 何ぞ況んや妻子を戀はんや

凝霜被野草 凝霜、野草を被ひ

歲暮亦云已 歲暮れて亦た云に已む

この詩の中には、世の無常さに耐え兼ねて、最も信頼すべき親屬を捨ててまでもこの世界からの絶望的な逃亡を試みる阮籍が描かれている。この詩中の「一身すら自ら保てず、何ぞ況んや妻子を戀はんや」の句から推測される阮籍の孤獨性は、極度に高いものといわねばならない。彼の詩に、他人との現実的な共感や連帶を詠うことがないのは、そのためである。もちろん、彼の詩の中には、知己、良友を希求してやまぬ彼の姿が見られる。しかし、それらの対象は神仙であり、また古人であって、決して實際に得られて歡びを分かちあえた良友ではないのである。

これに對して嵇康は、その詩集に三種の贈答詩を残すことから充分推測できるように、共感を得ることができ、それを詩の中に詠い込めるほどの者が現實に身近に存在していた。

例えば、嵇康と終には袂を分かつてしまふ兄との交遊の思い出を詠う詩では、

良馬既閑 良馬既に閑ならされて

麗服有暉 麗服には暉きあり

左攬繁弱 左に繁弱を攬り

右接忘歸 右に忘歸を接さしむ

風馳電逝 風のごとく馳せ電のごとく逝き

躡景追飛 景を躡みて飛を追ふ

凌厲中原 中原を凌厲して

顧眄生姿 生姿を顧眄たり

と詠う。この詩は、かつて二人が共に行なつた狩りの一日を回想するものと思われる。その狩りはそれ自體痛快なものであつたようであるが、その痛快さや喜びは、嵇康の一人よがりであるものではない。中原に馬を走らせてふとふりかへつた時、そこに兄というその喜びの共感者の姿を確認することによって更に充足されるものである。

もっとも、この詩の場合は、官界に出ていこうとする兄を引きとめる目的があつたのだから、かつての兄に對する心情をことさらに強く表面に出したものと見えるかも知れない。しかし、もしそうであるのなら、かへつて嵇康の、兄という喜びの共感者とずっと共に過ごしていたいという願望が一層明らかに見えてくるように思われる。

また、先に擧げた「思親詩」中の、亡き母に對する嵇康の慟哭も、單に肉親の死というばかりから生まれるものではない。その詩中に「陽春に感じて、慈親を思ふ」と述べるように、彼の母が嵇康を陽春の如く暖い慈愛を以て理解してくれたためなのである。

右の例は、共に肉親が共感者、理解者として描かれるものであつたが、その共感者たちは、當然ながら肉親ばかりではない。友人の阮德如に與えた詩では、彼との離別を「郢人忽ちにして已に逝き、匠人寢みて言はず」と、『莊子』中の故事、相信頼し得た故に命がけの離れ技も平氣で演じられた郢人と匠人と死別に比えて詠つてい

る。

これらの例は、肉親や良友との離別の際にかえって顯われる粘康における共感者の實在の例であったが、次に擧げる「雜詩」の場合は、良友の存在の歡びを、その會合のもとに詠うものである。

微風清扇 微風、清らかに扇ぎ

雲氣四除 雲氣、四よもに除かる

皎皎亮月 皎皎たる亮月

麗于高隅 高隅かみかに麗る

興命公子 興じて公子を命よび

攜手同車 手を攜えて車を同じくす

龍驤翼翼 龍驤は翼翼として

揚鏢踟蹰 鏢を揚げて踟蹰す

肅肅宵征 肅肅として宵に征き

造我友廬 我友の廬に造る

光燈吐輝 光燈は輝きを吐はなち

華幔長舒 華幔は長く舒ぶぶ

鸞觴酌醴 鸞觴もて醴を酌し

神鼎烹魚 神鼎もて魚を烹る

絃超子野 絃は子野を超え

歎過縣駒 歎は縣駒を過ぐ

流詠太素 太素を流詠し

府讚玄虛 玄虛を俯讚す

孰克英賢 孰か克く英賢たりて

與爾剖符 爾と剖符せん

澄みきった月夜のおもしろさに誘われて、友人と共に車でしばらく外をぶらついた後、もう一人の良友の宅へと向う。その良友の宅での接待のありさまは、食事も音楽もすばらしいものであった。彼らとの話も、日ごろ嵇康の夢みていた「太素」や「玄虛」といった形而上の問題に及ぶ。最後の二句「孰か克く英賢たりて、爾と剖符せん」は、その良友たちに對する絶大なる讚辭であり、嵇康の彼らへの思い入れの深さを明示するものと思われる。この詩の主題は、宴會の楽しさもさることながら、嵇康がそれ程の良友をその場に得た喜びであるとしても過言ではな
いだらう。

四

このような良友や肉親の存在は、危険であじけないばかりの俗世で嵇康が無難に暮らしていこうとするとき、その

生活をなんとか耐えられるものにしてくれる大きな救いの力となっていたに違いない。一方、阮籍にはそれがなかった。だから、彼の作る詠懷詩には孤獨ややるせなさが極めて強く漂うことになるのだと思われる。

しかし、阮籍のこの孤獨さは、世の中への憤懣や悲しみに一人でひたすら耐えることを彼に強いたけれども、彼の生命を守るためには大いに役立つたであらう。なぜならば、良友を現實に持たない以上、自分一人で自己充足的に生きることが出来るからである。つまり、西氏が考えたように、阮籍は自己を眞に理解してくれる友人がいない以上、神仙を想定して自己の理解者とし、その不満を昇化させざるを得ず、本質的には孤獨であり続けねばならないのだけれども、その孤獨は彼のみの問題として、一人でいちずに耐えることによって解決することが可能である。

これに對して、嵇康のように現實に彼の理解者を持つてしまった場合、その理解者は彼と共に世間に暮しているわけであるから、時には思わずも無常の風に吹かれて世を去ったり、或いは嵇康の傍から離れていく。その離別の悲哀については、嵇康一人が耐えればすむ問題である。だが、嵇康にとって耐え難い人生に歡びを與えてくれた理解者が理解者のまま、嵇康が極力對決を避けていた世間と對決を余儀なくされてしまった場合、嵇康はその良友と良友である以上、共に危険にさらされねばならなくなるだろう。

呂安事件は、正しくそのような場合である。

この事件のあらまは以下のようなものである。^(?) 嵇康には呂安という良友がいた。呂安には呂巽という兄がおり、嵇康は彼とも交遊があった。ある日、呂巽は呂安の妻に手をつけてしまう。立腹した呂安は訟えようとするのだが、嵇康はそれを思い止まらせ、二人の仲を調停する。ところが、呂巽は不安のあまり、呂安に不孝の冤罪を被

らせ、邊地へ流させてしまふ。呂安は配流地へ向う途中嵇康に手紙を送る。この手紙を読んだ當時の権力者司馬昭は怒り、呂安を追って獄に下してしまふ。嵇康はこれに對して責任を感じ呂安の求めに應じて辯明へと出て行つたのであつた。

この事件の最中において、嵇康は呂巽に絶交の書を與えている。その中で、嵇康は二人の仲を調停した理由について、「蓋し足下の門戸を惜しみ、彼此をして恙無からしむるを欲すれば也」と述べる。これは、無難に生きるのがよいという嵇康の處世觀のあらわれであらう。ところが呂巽はその嵇康の好意を裏切ってしまった。そこで、嵇康は、

都か(呂安)の足下かに含忍せしは、實に吾の言に由る。今都は罪を獲、吾は爲に之に負く。吾の都に負くは、足下の吾に負くに由る也。悵然として圖るを失す、復た何をか言はん哉。此くの若くなれば、心は復た足下と交らんとする無し矣。

と責任の關係を順に述べて呂巽を責め、絶交を申し出るのである。ここには、良友呂安に對してその道の選擇を誤まらせた責任感と、信頼を裏切つた呂巽への憤慨がある。それは、嵇康が人を信じることのできる人間であつたことを物語るものである。友を信じて裏切られることを予想していなかつただけに強い憤慨もせざるを得ないのであつた。

處世において無難を第一とする嵇康にすれば、たとえそれが冤罪であつたとしても、呂安が流される程度で終るなら、彼の行爲は呂巽との決別に止まり、この事件はそれ以上仕方ないものとして受けとられたかも知れない。

しかし、呂安が獄に下され生命が危くなつたとすれば、事態は嵇康に二者擇一を迫る。一つは、良友呂安の冤罪をはらし、且つ呂安の手紙に對する司馬昭の誤解を解くか、もう一つは、呂安と交遊を絶ち、巧妙に立ち廻つてこの事件から手を引いてしまふかである。

この選擇は嵇康の今後の基本的な處世法を決めるものであろう。なぜなら、これは、自己の理解者を捨てて一人孤獨に生きるか、または、孤獨よりも理解者と共に生きるかを選ぶことになるからである。嵇康は、どうやら理解者と共に生きようとする方を選んだようである。

ところで、魏末のこの時期は、已に司馬氏の勢力が魏を壓倒していたとはいへ、魏と姻戚關係を持つ嵇康については、その人望⁽⁸⁾や、クーデターに加擔可能な軍事力も持っていたらしいことからして、司馬氏にとっては無氣味な存在であつたと考えてよい。⁽¹⁰⁾さればこそ、嵇康は官界より遠ざかり、世間との抗いを避けもしようとしていたのであつたらう。よつて権力者の力で何如様にも決められる裁判ざたにまき込まれることは、極力避ける必要があつた。呂安に訴訟を思い止まらせたのも、彼に濟世の志があつて、訴訟を機に司馬氏と抵觸する可能性があつたことが、その理由の一つと思われる。⁽¹¹⁾

この裁判は、予想されるように、嵇康側の完全な敗北に終る。判決者である鍾會が述べた判決文は、それがどんな小さな世界でもその力の下に支配しようとしてやまない権力側の思想を明らかにする。⁽¹²⁾その壓力は、嵇康の小舟にも比されたさやかな個人的世界ですら吹き飛ばさずにはすまないものなのであつた。

嵇康もこの事態は予想していたに違ひない。にもかかわらず法廷に出て呂安のために辯明をしたのは、良友呂安

との信頼関係を重んじたからに他ならない。つまり、嵇康にとっては、理解者である良友との信頼関係のもとに生きるの方が、死の恐怖に勝るものだったわけである。

五

以上の考察が妥当なものであるとすれば、嵇康の處世の失敗の大きな原因が、理解者を求め信じるという強い心情にあったといつてよいと思われる。

嵇康自身も、受刑の直前に死を身近に感じるにあたっては、良友を求めるといふ行爲が、當時いかに危険な行爲であったかについて、氣がついていたのではないか。彼が獄に下されて後作つた最後の作、「幽憤詩」中には以下のように詠っている。

曰余不敏 曰に余不敏にして

好善聞人 善を好むも人に聞し

子玉之敗 子玉の敗るるや

屢増惟塵 屢ばしばしば惟塵を増す

ここでは、自分の人を見る力の欠落を反省する。子玉の話は『左傳』にあるもので、ここでは、ある人物を信じて推薦しては失敗し、ひどいめに會つてきたという回想をいう。これは、具體的には、やがて裏切る呂巽を信じて、呂安のために仲をとりまとめようとしたことの失敗を背景とする句であろう。嵇康はさらに續けて詠う。

大人含弘 大人は含弘にして

藏垢懷恥 垢を藏し恥を懷く

民之多僻 民の僻多くとも

政不由己 政は己に由らず

惟此褊心 惟だ此の褊心

顯明臧否 臧否を顯明にせんとす

感悟思愆 感悟して愆を思ひ

怛若創痛 怛きこと創痛の若し

以上の八句、前半四句は大人よろしく、世間のことなど知ったことかとはっておきさえすればよかったことを述べ、後半では、それをわざわざ白黒をはっきりさせようとしてしまう自分の心の褊急さをいい、それが、このように獄に下される結果を呼んだのだと嘆息をつく。これが、呂安の事件に對して、余計なことをしてしまったという嵇康の反省にもとづくことは、十分推測できるものである。この「褊心」という言葉に注目するならば、この時の嵇康にとっては、良友のために白黒を明らかにするという行爲も、自己の褊心のなせる處世の失敗だったとして認められていると見てよい。つまり、初めは、良友との信義を重んじ、死すらも恐れず良友のために辯明に出て行ったとはいえ、いざ獄に下されて死と直面してみると、その良友のための行爲は實は自分にとって本來不本意なものであったと氣づいて、嵇康は嘆息をつくのである。この嘆息の裏側には、自己の生命の保全を強く求める心情があ

る。それが、友人と生死を共にするまでの交遊を行ったことに對する疑問を起させたのだと考えてよい。「幽憤詩」に、孤獨の影がつきまとい、他人との連帶や歡びの共有を求めることがないのは、嵇康が、この時代に自己を保全して生きるためには、良友を求めることすら甘く、ひたすら孤獨に耐え忍んでいかねばならなかったことに氣づいていたからに違いない。その詩の最後は、ひっそりと世に隠れ、孤獨に生きていくべきであったことを後悔するが如くである。

煌煌靈芝

煌煌たる靈芝は

一年三秀

一年に三たび秀はなくに

子獨何爲

子獨り何爲れぞ

有志不就

志有るも就らず

懲難思復

難に懲りて復せんと思えは

心焉内疚

心は焉に内に疚いじむ

庶曷將來

庶くは將來に曷め

無馨無臭

馨無く臭無からん

采薇山阿

薇を山阿に采り

散髮巖岫

髮を巖岫に散ず

永嘯長吟

永嘯長吟して

嵇康詩小考（甲斐）

頤性養壽 性を頤い壽を養はん

おわりに

嵇康が刑死するに當つて、とりわけて自己をとりみだすことがなかつたことを思えば、「幽憤詩」でついた嘆息にも、それなりに結着はつけられていたものであつたらう。

ところで、この嵇康の死は、視野を廣げて見るとき、この時代濟世の志はもとより、もはや良友との個人的な連帶感とか、共感とかいったささいなものささえ、生命を保全するためには切り捨て、一人山林にでも逃げ込む必要が起り始めたことを示唆するものではあるまいか。「よくいえば孤高、悪くいえば連帶感の欠落、それが六朝人に支配的な精神的基調であつた」⁽¹³⁾と評される六朝の氣風の一つの始まりを、ここに見ることができるようになる。

(一九八五年十二月二十六日)

(注)

ては戴氏に依るところが多い。

- (1) 『世說新語』、簡傲篇、劉孝標注に引く『晉百官名』略同。
- (2) 西順藏『中國思想論集』Ⅱ、「竹林の士とその「自然」に(じふ)」。P86~P87。尚、この小論を制作するにあつては、西氏の論考に多くの啓發を受けている。
- (3) テキストは『嵇康集校注』(人民文學出版社出版 戴明揚)に依り、諸本を参照した。語句の出典及び解釋にあつては、
- (4) 『三國志』魏書裴氏注、及び『晉書』嵇康傳参照。
- (5) 『詩經』邶風 柏舟。「汎彼柏舟、亦凡其流」(傳)興也。……箋云、舟載渡物者、今不用而與衆物汎汎然俱流水中。興者喻仁人之不見用而與羣小人並列、亦猶是也。
- (6) 詠懷詩のテキストは『阮籍集』(上海古籍出版社出版)に依り、詩番號もそれに従う。

(7) 呂安事件については、松本幸男「嵇康と呂安事件」(立

命館文學、第四三〇、四三一、四三二號)及び、松浦崇

「嵇康の「幽憤詩」について」(福岡大學研究所報、第
五十七號) 参照。

(8) 『世說新語』雅量篇、「嵇中散臨刑東市、神氣不變。……

太學生三千人上書、請以爲師、不許。……」劉孝標注に
引く王隱『晉書』曰「康之下獄、太學生數千人請之、于
時豪俊皆隨康入獄、悉解輸、一時散遣」。共に嵇康の人
望を物語るものである。晉書嵇康傳も略同じ。

(9) 『三國志』魏書嵇康傳裴氏注に引く『世語』曰「毋丘儉
反、康有力、且欲起兵應之、以問山濤、濤不可、儉亦已
敗」。

(10) 『晉書』嵇康傳に鍾會が司馬昭に告げた語「嵇康、臥龍

也、不可起公無憂天下、顧以康爲慮耳」を載せる。これ
は、司馬氏側の嵇康觀を示すものと思われる。

(11) 『三國志』魏書、嵇康傳、裴氏注に引く『魏氏春秋』
曰：「(呂)安亦至烈、有濟世志力、鍾會勸大將軍因此
除之、遂殺安及康」

(12) 『世說新語』雅量篇劉氏注に引く『文士傳』曰：「鍾會
庭論康曰、今皇道開明、四海風靡、邊鄙無詭隨之民、街
巷無異口之議、而康上不臣天子、下不事王侯、輕時傲
世、不爲物用、無益於今、有敗於俗。昔太公誅華士、孔
子戮少正卯、以其負才亂羣惑衆也。今不誅康、無以清潔
王道。」

(13) 吉川忠夫『六朝精神史研究』第八章、沈約の思想。頁二
三一。